

甲田の裾

KŌDA NO SUSO



2013

3号

松丘保養園の機関誌



奥様テルさんの肖像画を手に微笑む
在りし日の成瀬 豊氏
(写真提供：国立ハンセン病資料館)

成瀬 豊略歴

- 1922 (大正11) 福岡県に生まれる
- 1940 (昭和15) この頃ハンセン病発症
- 1952 (昭和27) 国立療養所菊池恵楓園入所
入所者の絵画グループを創設、参加。
付き添いとして世話をしていた重症患者の肖像
「ロザリオの祈り」を描く
- 1957 (昭和32) 国立療養所松丘保養園転入所
重不自由棟鳳鳴寮で視覚障害など3人の重不自由患者の
付き添いとして同居し、介護に従事する。
「叫び」「心境」はこの生活の中で描かれた。
- 1961 (昭和36) テルと結婚
- 1975 (昭和50) 「叫び」貞明皇后のお徳をしのぶ療養作品展会において、(財)藤楓協会 総裁 高松宮宣仁親王より銀賞を受賞
- 1976 (昭和51) 「春の保養園」貞明皇后のお徳をしのぶ療養作品展会
佳作受賞
- 1981 (昭和56) 「練習風景」貞明皇后のお徳をしのぶ療養作品展会
銀賞受賞
- 1993 (平成5) 「叫び」ほか国立ハンセン病資料館へ寄贈
- 2007 (平成19) 熊本市現代美術館「ATTITUD 2007」極限の美—
日本・台湾・韓国ハンセン病療養所入所者の作品展に
「叫び」展示
- 2007 (平成19) 「テル肖像」ほか青森市へ寄贈
- 2013 (平成25) 松丘保養園で死亡

甲田の裾 平成25年3号 目次

成瀬 豊 追悼展「叫び」 …… 松丘保養園園長 川西 健 登 … 2
成瀬 豊 追悼展によせて …………… 国立ハンセン病資料館 学芸員 金 貴 粉 … 4
成瀬 豊 追悼展によせて ……………… 滝田 十和男 … 8
展示作品紹介 ……………… 13
来訪者感想 ……………… 17
短歌 白樺短歌会 ……………… 18
尋常高等小学校同級生 ……………… 三浦 喜美子 … 20
人事異動 ……………… 25
野の花の微笑み(6) ……………… 比良 信治 … 26
自治会日誌 ……………… 35

表紙 「叫び」成瀬 豊画 国立ハンセン病資料館所蔵
カット 成瀬 豊 (バックナンバーよりリユース)
写真提供 木村伯龍・福祉室・編集局

「甲田の裾」バックナンバー(平成24年1号～)は
下記ホームページより閲覧いただけます。

松丘保養園のインターネットホームページ
<http://www.hosp.go.jp/~matuoka/>



成瀬 豊 追悼展 『叫び』

松丘保養園園長 川 西 健 登

今年の五月、一人の画家、成瀬豊さんが松丘保養園で九十一歳の生涯を終えました。十八歳頃にハンセン病を発病した成瀬さんは、三十歳で療養所に入所してから約六十年間、ハンセン病療養所の中で生きられました。

もともと絵の才能があり描くことが好きだった成瀬さんは折に触れて絵心に取り憑かれるように療養所の身の周りの出来事を題材に描かれました。当時の療養所の生活は貧しく、生きるためには障害を負った身体を押して毎日毎日働かなければなりませんでした。そのわずかな隙に絵を描かれたのです。本格的に絵を学びたいという気持ちはあったものの、学資が続かなかったそうです。ですから成瀬さんの絵はほとんど独学でした。

成瀬さんの作品はハンセン病療養所の生活のただ中から生まれました。代表作である『叫び』は不自由舎で療友の付き添いとして日常の世話や介護をする中で成瀬さんが抱いた想い、深い心の奥底からの叫びが描かれています。奥さんのテルさんによると、「切ないから描いた俺の絵は（同じ題のムンクの絵より）『叫び』の題に相応しい」と言っていたそうです。

療友を描いた『心境』や『ロザリオの祈り』などでも「眼が見えないからといって黙っ

て描くわけにはいかない」と描く度に療友の了解を得ておられます。「写真もないから心算えに描いた」という絵を見たお孫さんが「ああ、おじいさんだ」と絵を抱いて泣いたこともあったそうです。そこには一人の人間としての尊厳を持った重症の療友へ注がれた成瀬さんの暖かい共感の眼差しが溢れています。視力が衰えてからは一本の線を引くにもテルさんの助けを必要とすることがあったそうですが、亡くなる直前まで新しい絵の構想を語っておられました。

成瀬さんはいつものにこやかで温厚な紳士で、決して声高に意見するような方ではありませんでした。しかし作品に描かれた魂の奥底の想いは痛切です。これは『天国と地獄』のようなユーモラスな面のある作品においても同様に感じられます。この叫びは長い歳月をハンセン病を負って生きられた患者さんたち、さらには今なお社会の片隅で様々の困難を負って苦しんでいる名もなき多くの人々の想いにも通じるような気がします。

今回、成瀬さんの声なき叫びに込められた私たちへのメッセージを聴きとり、広く社会の人々、特に若い世代のみなさんにご紹介させていただきたいと願って、ささやかですが「成瀬豊追悼展『叫び』」を企画しました。

みなさんのご来園をお待ちいたしております。

この追悼展のために国立ハンセン病資料館と青森市から、成瀬さんご自身が寄贈した作品をお借りすることができました。心から感謝いたします。



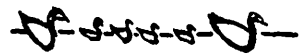
成瀬 豊 追悼展によせて

国立ハンセン病資料館 学芸員 金 貴粉

川西健登園長先生より成瀬さんの訃報の知らせをいただいたのは、七月に入ってからのことでした。成瀬さんが五月に亡くなられたことについて、私を含む当館の学芸員は皆、存じておらず、一様に驚きを隠せませんでした。保養園に何う度にも、私たちを温かく迎えて下さった成瀬さんのお元気なお姿しか拝見していなかったため、成瀬さんの訃報をまさか聞くとは思っていませんでした。

松丘保養園における遺作展開催のために、「叫び」をはじめとする作品を運ぶ間、成瀬さんとの思い出がいくつも思い出されました。そのどれもが穏やかに朗らかにお話される姿でした。しかし、改めて今回の作品を一点一点拝見する中で、不条理なことに対する怒りとそれに抗する思いがその中に込められていたのかと思う瞬間もそこにはありませんでした。

成瀬さんの絵は果たしてどのように生み出されたものだったのでしょうか。



成瀬さんが絵を描き始めたのは、一九五二（昭和二七）年に菊池恵楓園に入所してからだだったといえます。入所後、知人もいない療養所で故郷での出来事を思い出し、寂しさを抱えていた中で、一人でもできる楽しみを絵に見出したのでした。ちょうどその頃、らい予防法闘争が起こり、成瀬さん自身も人の自由、権利を奪う予防法に反対する思いで、予防法闘争に積極的に参加しました。予防法闘争が落ち着いた後、菊池恵楓園で仲間と共に絵の会を結成し、その頃から「絵は単にものを写すだけではなく、自分の心にあるものを表現しなければならぬ」と思うようになったのでした。また、「人に感動させる絵は、まずは自分が心ゆさぶられるものでなければならぬ」と思っていたとも語られていました。

その思いは松丘保養園へ転園後も成瀬さんを突き動かしたのでしょう。この松丘という地で、当時、付添介護をしていた部屋の不自由者を描いた「パンを食う人」（青森市所蔵）、「心境（ある友人の肖像）」（同所蔵）、そして「叫び」が生み出されたのでした。

成瀬さんの代表作である「叫び」は、一九九三年、当館が高松宮記念ハンセン病資料館として開館する際にご寄贈いただきました。調理をしようとした成瀬さんが魚の頭を切り落とした時、その丸い目と自分の目が合い、口を少し開けたようにしている魚に対して「お前も言いたいことがあつたらう。俺もそうだ。俺もどうしてこんな病気になるのか。共に思いのたけを大きな声で叫ぼうじゃないか」と思つて描いたと、成瀬さんは度々お話されてきました。二〇〇七年には熊本市現代美術館で開催された

「ATTITUDE2007」展にも展示され、南みなみ寫宏館長（当時）からは、「差別に対する恨み辛みを超越した境地を示す作品」という評価も受けました。

成瀬さんは、これまで様々な賞も受賞されましたが、そこに重きをおくよりは、むしろ「自分が心ゆさぶられるもの」の表現を求めて自分自身や周りの入所者と真摯に向き合ってきたのではないかと思います。そのまなざしは「パンを食う人」を描いた時のエピソードにも表れていました。一九六〇年代に不自由者の「付添」作業をしていた時、視覚障がいをもった老人が「一度でいいから焼いたパンを食べてみたい」というのを聞き、なげなしのお金でトースターを買って、パンを焼いてあげたといいます。焼いたパンを喜んで食べる老人の姿を心にとめておこうと、急いでその場にあった点字用紙にスケッチしたものが「パンを食う人」となりました。成瀬さんはその老人の喜びを自分の喜びとするような愛情深い方で、それが「絵」という形となって表れたのです。

また、当館に成瀬さんの旧知の親友が制作した作品が収蔵されることになったことを伝えた時、大変喜ばれていた姿を忘れることはできません。たとえ住んでいる場所は遠く離れてはいても、回復者としての思いを分かち合った仲間への思いも途切れることはなかったのではないかと思います。

その時に成瀬さんからいただいた手紙の中には次のように書かれていました。「資料館は優劣を問う展示会場ではなく、明治の世から悲運を嘆いて世を去ったハンセン病患者の

全てが真実を世に訴える魂の寄り場とっております。」

その言葉を受けた時、改めて単なる芸術作品としての価値観でのみ捉えてはならないと思いました。今まで住み、働いていた場所や人の関係から完全に引き離され、社会的選択肢のすべてを奪われた中でもなお、自己実現を求めて生き抜こうとした姿が写し出されているという価値がそこにはあるのだと感じました。

最後に成瀬さんの療養所での生活を誰よりも支えていたのは、奥様のテルさんであったことは言うまでもありません。お二人で制作された「夫婦の自画像」（国立ハンセン病資料館蔵）、「窓から見える桜」（同所蔵）からは、一緒に作っているお二人の笑顔が見えるようです。

今回、追悼展を開催するにあたり、川西園長先生はじめ、松丘保養園福祉室の皆さま、自治会の皆さまによる多大なご尽力があったとお聞きしました。「叫び」を始め、当館所蔵作品は寄贈されて以来、初めて松丘保養園に里帰りします。成瀬豊さんのご冥福をお祈りするとともに、入所者の方を始め、多くの来場者にご覧いただけることを願います。



成瀬 豊 追悼展によせて

滝 田 十和男



甲田の裾編集局から、成瀬豊追悼展について、書いてほしいという要請を受けたときは、体調もあまり自信がない自分に、辟易していた時だったから、どれだけの事を書けるか、とても不安であった。

成瀬豊追悼展は、松丘保養園の管理棟の正面玄関の、すぐ左側の「交流ホール」を会場として、七月二十四日～九月二十三日までの、ロングランで展示されて、新聞紙上でも紹介されたり、広くポスターが配布されたりのお陰でか、ぼつぼつ観覧者も訪れているようなので、私は喜ばしく思っている。

松丘保養園では、昭和三十年頃から入園者の絵画や書道、または手芸作品、盆栽など入園者の作品を揃えて、青森市内松木屋デパートの四階催事場で、何度となく松丘保養園展を開催して、市民にひろく

紹介してきた。

一時はさつきの花季になると、大々的に盆栽の展示即売会を開いて、話題になったこともある。

また県庁玄関ホールでの写真展など開いたことも、そう古い昔のことではない。

だが、園内の状況は人口の減少と、超高齢化の波に追い立てられて、かつてのようなエネルギーは、沸いて来なくなつた。これも当然の成りゆきとは言え、寂しくなつてしまつたの一言に尽きる。

そうした時に、この度、園当局のはからいで、然も個人一人だけの「成瀬豊追悼展」を開いてくださった事は、たいへん意義のあることで、私からも有り難とうと、感謝の言葉を呈したい。

さる五月十七日に享年九十一歳で、この松丘で生涯を閉じた成瀬さんとは、彼が入園当時から、

ずーっと親しくしていた間柄でありながら、私の体調が勝れず、お通夜にも告別式にも参る事が出来ず、なんとも申し訳ない気持ちで居たが、亡くなる数日前までは、彼が治療棟の待合室に車椅子に乗せられて来て、顔を合わせると、いつも挨拶を交わしていた、そして二言三言、励ましの言葉を掛け合っていたのに……。この一文で、せめてもの彼の御霊の供養の足しになれば、と願う気持である。

思えば昨年九月末頃からの、私自身の体調異変に襲われて以来、もしかして、私の方が彼より先にお迎えが来ても、おかしくない状況を呈していたのに、医局の手厚い処置に守られたお陰で、曲りなりにも今こうして小康を得て、彼を偲ぶ文を書こうとしている。不思議なくらいだ。

彼が九州熊本の菊池恵楓園から転園して来たのは、たしか昭和三十二年頃だったと思う。その頃の彼の健康状態というか、病状のランクは、片足に少しの麻痺があるだけで、歩くにもそれほど目立つことはなく、五体そろった健常者に近いほど軽症者に見えた。

そのために早速、重不自由棟である鳳鳴寮の五号

室の、付き添い看護係りとして配属された。

その以前には、一室三十畳敷きの部屋に十二人も詰め込んで、ギューギュー詰めの生活であったが、昭和二十八年のらい予防法改正闘争の成果の一つとして、三十畳の部屋を半分に仕切って、一室十二畳半の間取りに改造した頃で、鳳鳴寮もその枠内に入り、鳳鳴寮五号室に最も重い盲人の重不自由ばかり、三人居る中に、彼は付き添い係りとして配置されたのである。

付き添い係りは、盲人たちと起居を共にして、四六中一緒に居るのだから、仲々の重労働であり、気骨の折れる作業でもあった。

まず朝起きたら、盲人たちの布団の上げ下げ、洗面の介助、食事の支度や後片付け、それに部屋や廊下とトイレの掃除、それに加えて、治療棟や浴場への誘導とくれば、大抵の人は長続きしないで退散する人も多かった。

それを彼は不平ひとつ漏らすことなく、黙々と勤め、同居する盲人たちとも気心を通じあわせて、親しまれていることは、家族同志のような和気あいあい、すこぶる評判が良かった。

おなじ国立の療養所とは言え、彼が以前住んでいた南の九州の熊本と、北のはずれの松丘では、気候や風土も、そこに住む人々の気質と言ったものも、大分へだたりがあるのに、彼は入園当初から、そうした違和感を感じさせなかつた。東北人のほくどつとした氣質がよく言われるが、彼はそれ以上で、よく馴染んでくれて、何事にも協力的であつた。

追悼展の会場に飾られて、ひとときわ異彩を放っている絵画の「叫び」と「心境」と題する二つの作品があるが、あれは鳳鳴寮の不自由室で盲人達を世話する、付き添い看護をしながら、居室と便所の間にある、暖房用の薪木など積み上げた、ごく狭い物置の片隅で、暇をみつけてはコツコツと絵筆を執つた、不遇時代の制作であつた。作品が出来あがつたとき、真つ先に私に観せてくれて、九州弁で「この作品何うなな？」と意見を求められた記憶がある。

彼が前に居た恵楓園では、趣味を一つにする絵の制作グループがあつて、互いに作品の批評を仕合つていたけれど、松丘には絵のグループが無いので、そう言う点では、彼は孤独感に苛まれながら、黙々

と絵筆を動かしていたのである。

あの「叫び」の作品も、彼が当時、給食では副食の日には、生魚のままの現物を各室に配り、焼くなら煮るなどの料理は、各室任せの時代で、付き添い看護係りは、それを調理して、盲人たちの食卓に乗せなければならなかつたから、勢い成瀬さんの包丁捌きが求められた。

あの「叫び」と題する絵は、作者の実際の生活から生まれてきたもので、実感がこめられている。

(ムンクという画家の作品で「叫び」という有名な絵があるが、それに刺激を与えられたということは、まず無いと私はおもっている)

成瀬さんのもう一つの作品「心境」のモデルは、同居していた山形県出身、遠藤順喜さんという五十歳代の患者で、早くから視力を失いながらも、マッサージ術を覚えて、誰彼なしに肩を揉んでくれたり、仏教の経文を暗記して、葬式があると三好恵順和尚(この人は正式に真言宗の得度を受けた人で、誰かが亡くなると、お通夜には必ず導師をつとめていた。その三好和尚の後ろで、喉を冒された洪い声で唱和していた、あの画面からは、そうした遠藤さ

んの姿が、目に浮かんでくるのである。

それから程なくして、彼成瀬さんは良縁を得て、少し歳の離れた若い軽症の細君テル子さんと、独身室にさよならをして、夫婦室の鈴蘭寮に移るのであるが、夫婦舎と言っても、現在のような鉄筋コンクリートの堅固な建物ではなくて、戦後の昭和二十六年に松丘では初めての、木造のバラック建て一室四畳半の手狭な部屋が、七室あるうちの第一号室が空室となっていたので、そこに新居を構えた彼は、漸く遅い春の訪れを迎えたかのように、表情も晴れやかであった。

夫婦舎に移ってからは、不自由舎の付き添い看護の作業ではなく、今度は盲人会の世話係りとなつて、毎日盲人会館に出勤して、前とは少し違うけれど、やはり盲人たちのために働くという意味では同じことで、実直な彼の持つて生まれた人柄が買われて、勤続二十年に及ぶ盲人会勤務も、彼だからこそ為し得たものと私は思つて居る。

松丘盲人会には、函館市の点訳グループである「ひとみ会」の方々が、昭和二十六年頃から、毎年春の五月、秋は十月と、年に二回は必ず、津軽海峡

を渡つて来ての慰問交流を続けているが、それらの受入れに骨身惜しまず働く、成瀬さんの姿に親しみを覚えてか、世話係りの彼の自宅まで立ち寄り、そこから又新しい絆が生まれ、長い親密な交際を続けている人も居るのも、彼の人柄がそうさせるのであろう。

これは随分と古い昔のことだが、青森市の松木屋デパートで、「サンパウロ美術秘宝展」というのが開かれたとき、今は亡き妻も元気な頃で、二人で観に出掛けた。デパートの四階の催事場まで、どんな事をして運び上げたのか、不思議に思うくらい、とてつもなく巨大な額縁に収められた、西欧の絵画の数々には、ただただ度肝を抜かれるばかりであった。だから青森に居ながら西洋画の名作に、直接触れるなんて、滅多に無いことであるから、すごく心が躍つたものだった。

なんでも、これらの作品は第一次世界大戦が始まる時、西欧の貴族たちは、戦火を逃れてブラジルに避難する際、代々家宝としてきた中世の美術品を、サンパウロまで、運んできたものであるという。

会場を観て回っていると、そこへひよっこりと、

成瀬さんに出食わしたのには驚いた。彼も有名な作品を一見に如かずとばかり、駆け付けて来たもので、食い入るように画面に観入りながら、有名な画家の作品の前になると、知識のある限りトツトツとした彼の例の語り口で、解説してくれるのであった。

拙文でたびたび登場した松木屋デパートも、市内のあちこちに誕生した、スーパーや量販店に押され、十年ほど前に閉店してしまつた。買い物は勿論だが文化的催し物にも積極的に営業していたし、松丘保養園の患者の文化作品にも理解を示して、何度となく展示の場所を提供してくれた。だから閉店を寂しむ思いは、私一人ではあるまい。

話を元に戻して、追悼展は、さきに触れた「叫び」と「心境」の二作品のほかは、機関誌「甲田の裾」の表紙に、機知に富んだ画風で描き続けた「デッサン」が多く紹介されているが、夫婦舎の狭苦しい四畳半の小部屋生活では、制作の思いが湧いてきても、キャンバスを立てる余地もないから、しげんと絵の世界から、縁遠くなつて行つた時もあるだろうし、松丘にも専門的に絵の事を語り合うグループ仲間が居たり、何の妨げもなく使えるアトリエがあつ

たりすれば、もつと本式の絵筆を、伸び伸びと振るうことが出来、もつと多くの素晴らしい作品を、遺していたに違いないと思う。けれども、粗悪な環境の中からさえ、これだけ多くの優れた作品を、残して呉れたには、尊敬の言葉を捧げて、脱帽するばかりである。

追悼展は、九月二十三日まで、つづけて開かれている。どうか、ひろく関心のある方は、ぜひ何度でも会場に、足を運んで頂きたい。

松丘にも、こんなに真摯な素晴らしい人生を送つた人が居る、いや居たつたんだ。と言う証しを胸に刻んで帰って頂けたら、成瀬さんも天国で、きつと喜んで呉れているに違いない。

成瀬 豊 追悼展

場所 松丘保養園 交流ホール

会期 平成25年9月23日まで

会期中無休

時間 10時～16時 入場無料

展示作品紹介

「叫び」(表紙)

「ある日夕飯のおかずにと魚を一匹まるごとくれていたんですよ。それでちようど夕方近くなってきたから、やおら魚を煮て皆に食べさせないといけんと思ひましてね。なんか赤い魚だったと思ひますよ。それをあんまり切れもしない出刃包丁を使つて頭を落としたときに、部屋から私が世話をしている人が「ちよつと成瀬さんきてくれんな」って呼ぶんです。まあしようがねえ、何か事があつてもいけん、付き添いやから責任がある、魚どころやないと思つて急いで行つたんですよ。したら「いや、ちよつとそこのちり紙を取つてくれんか」っていうだけのことだつたんです。

それでその人にちり紙を取つて渡して急ぎ足で台所に戻つて来たら、魚は無事だつたんでひとまず安心しました。そして、さあ今から料理にかかろうと

思つてひよつと見たら、切り落とした魚の頭が、切り方の具合かどうか斜め上向いてるんですよ。それで魚特有のあの丸い目がちようど斜めに見上げるような格好になつて、立つてる私と目が合つたわけですよ。そうしたら、どうしたわけか私の気持ちの中に何かこう思いがわき上がつてきましてね。ああ、お前も運の悪い魚だなあ、あれだけ大きい海にいなから、手のひら広げたほどの網に引つかかつたばかりに、俺に首を落とされて殺されてしまつた。だけど俺だつて人間として言いたいこと、なんぼでもあるんだ。同じだよ、お前と俺は。俺も一億二千万からおる日本国民の中で、どうしてこんな病氣になつたもんだか。お前も言いたいことあるだろうし、俺だつて言いたいことはある。言いたいっていうよりも、二人で大きなありつたけの声で叫ぼうじゃないかつて。そういうことだつたんです、絵にしたきつかけは。

それで七輪に鍋を置いて煮炊きしているうちに、よし、やれるだけやつてみようと思ひましてね。そこにあつた指ぐらいの木炭で広告だか包み紙だかの

裏つかわに、こう皺がよつてるのを手で伸ばしてね、思いついた大体の構図を描いて残しておいたんです。それからは暇あるごとに、まな板と包丁と魚だけで絵にするつても、どういう構図にしたらいいんだかと思つていろいろと考えて、デッサンもかなりの枚数をやりましたよ。魚の頭、その切り落とした頭がここにあつて、包丁をこう斜めにこつちから持つて来てね。私としては包丁は権力ですよ、権威。そのつもりなんです。それで口ですが、魚の口つてほんとは端にまで裂けるほど開いちゃいけないんだけど、魚と俺と一緒になつて叫んだ、あの叫びです。ね、それを表現したいんですから、魚の口をことさらに大きく開けてね。そしたらそれを見た友達が『これ、狸の頭か』つて言うんです。魚を描いて狸の頭かつて言われたんじゃ、どうしようもねえなあ。どうしたら魚に見えるかなと考えたわけです。それではわたのえぐれたところ見せて、尾っぽと鰭がついて、そして半身になつて骨が見えていけば、だいたい魚に見えるだろうと思つてね。うん、それであ、あの絵はできたんですけどね。」

(2012年 成瀬 豊 談)

「夫婦の肖像画」



「窓から見える桜」(ニテル画)



(上下2点とも国立ハンセン病資料館所蔵)

手作りの額が作品を味のあるものにしていきます。彫刻刀で模様を彫つたものであつたり、木の皮を貼り合わせたものであつたり。

額の上部の吊り紐を通す金具が、昔の缶ジュースのプルトップを利用していることに気が付く人は少ないでしょう。

また「吹雪が止んだ」などの多くの作品には、世話をしていた盲人会館にあつた「点字毎日」のこぼこの紙が使われています。

欲しいものが手に入らない貧しい時代に、「絵を描きたい、額で飾りたい」という思いから生まれた工夫ですが、夫婦二人で作り上げることの楽しみもあつたのではないのでしょうか。

「心境（ある友人の肖像）」



（青森市所蔵）

「昔、ここには患者に付き添い制度っていうのがあったんですよ。それはまあ、今のように職員がやってくれない遠い昔の話ですけどね。私これでも療養所に入るまでは草野球やってたくらい身体は丈夫でしたからね、付き添いをやりました。全盲の人とか症状の重い人の、全部で四人の世話をしていました。それで私を入れて五人で十五畳くらいの部屋でしかたね、そこで生活していました。私一人が世話をしてね。私が同じ蚊帳の中に寝起きた親爺は全盲なんですよ。生まれたところは山の中のようなところで、生い立ちからずっと寝ながら話してくれ

たりしました。

ある夕方部屋に帰ったら、他の人たちはそれぞれの集まりに出かけて行って、薄暗い部屋に親爺だけ一人取り残されたように座っているんです。物思いに耽っているような寂しそうな親爺は何を考えているのかなあと私思っただんですね。

眼が見えない人だからといって黙って描くわけはいかないですからね。（肖像を描いていいかどうか）尋ねたら意外にも「おまえが描いて他人が見たってどうということはない、描け！」と言ってくれたので、一枚だけ描いたんです。」

（2012年 成瀬 豊 談）

追悼展に訪れた入園者達が、

「あつ、遠藤さんだ！」と懐かしそうに見入っていたのが印象的でした。

「まさか、ここで遠藤さんに会えると思わねがったなあ」

「ハンセン病の人の特徴がよく現れている。

これは病気を患った人でないと画けない絵だね」

「パンを食う人」



(青森市所蔵)

食パンをお茶菓子にしながら茶を飲んでいて、「このパンを焼いて食ったら美味いと人が言うんだよな」と親爺が言うんです。食べさせてやりたいけどそうしたらパンを焼く機械を買わないけん。親爺の世話をするんで付き添い費がなんぼか出てましたからその金少し貯めて買うかなとおもったんです。買えるだけの金が貯まったんでトースターを電機屋へ買いに行つて。

「焼いたら美味しいなー」って喜んで食べてる親爺です。
(2012年 成瀬 豊 談)

「天国と地獄」



(成瀬テル氏所蔵)

これが猫だけれども、題は「天国と地獄」っていうんです。何故だかっていうと、この猫から追いつめられて、鼠は逃げ場を失つて鼠捕りに飛び込んだわけです。そして飛び込んで行つてみたら猫はなんぼ怒つたつて入れねえで、こんだ、これが安心して歌うたつていますね。これが安らぎ、まあ平安ですよ。これがまあ天国なんですけども、ここに入つたつてことは究極の地獄なんですよ、助かりようがない。そういうような意味で描いたんです。

(2012年 成瀬 豊 談)

追悼展 来訪者感想

○初めて松丘に来ました。偶然にも成瀬さんの絵を見て、正直驚きました。独自の画風ですが、詩や歌と同じに彼の思いが生々と伝わってきます。療養所は小さな世界かもしれないませんが、彼の生きた人生、療養所での思いが深く伝わってきます。奥様のテルさんが「成瀬は疑うことを知らない人でした」という言葉が印象的でした。人の思いは深く、彼の人生とその時々、思いが心を打ちました。(来園者)

○成瀬さんの心がよく伝わってきました。ぼくとつとしていますが、気持ち伝わってきました。(来園者)

○成瀬さんの思いや叫びが伝わってくるような思いがしました。素晴らしい企画ありがとうございます。(来園者)

○『叫び』の絵を見て、「冬の海のような荒々しく

暗い感じがしました。まるで、津軽三味線の高橋竹山さんみたいな感じがしました。」(来園者)

○「叫び」という絵を見たときに、とても思いが伝わってきました。

私も成瀬さんのように絵で思いを伝えられるようにしたい。(中学一年)

○たくさん絵を見て、絵を描く道具が少ないのに、一つ一つ細かく描いて迫力のある絵でした。

「叫び」の絵は、とても思いが込められていて、私にとってもよく伝わりました。私もこんな絵が描けたらいいなあと思います。(中学二年)

○いろいろな種類の絵があり、とてもすごかったです、お金がないながらも懸命に絵を描いていたことに、とても感銘を受けました。

奥さんの絵が一番素晴らしかったです。

(中学三年)

短歌

白樺短歌会

いのちある限り

滝田 十和男

目は霞み耳も聞こえずなりたれば木偶でくさながらに老ひを極めむ
眼も耳も失ひ強く生きたりしヘレンケラーに倣はねばならぬ
二重戸の外は吹雪くに耳萎えの我が部屋のみはいと静かなり
積みあげし雪の捨て場も無きままに訪れ遅き春をひた待つ
主あまじなき猫の窓辺に餌を乞ふしぐさ粉雪にまみれながらに
音なして吹雪のやまぬ日を籠るテレビは南の海開きとぞ
桜開化しきり伝はるに雪しんしん降り止む気配なく北国は
我が事にのみ拘はりて冬籠る日日に飽くなき雪降りつづく
長かりし冬のろろと去り始む咲かずじまひの葉桜萌えて

雪解けの遅く桜も珍らしく咲かずじまひの春は過ぎゆく
いのちある限りはそこに根を張りて華咲かせよとシスターの言ふ
老ひたれば記憶おぼろになりしとき絶句の果てに頭を叩く
寒氣団居座る空の雲低く名のみの春は芽ぶきも遅く
幾つもの病ひ宿せる身に起こる奇跡あらばと願ふけれども
下膳げぜんする食器触れあふ音のしてのちの廊下は静まりかへる
それぞれが個室に籠る生活の長ければ敢へて会話など無く
麻痺したる臉は閉じるすべもなく眠りいつしか目を開けしまま
嫁ぐ日の近き娘こを連れ訪れしひとも思へば旧き交じわり
生れたるばかりの頃のふくよかな顔立ちの娘の早や嫁ぐかや
道の駅の駅長なるに暇かけて会いに来たれり一人娘連れて
ふたたびは帰ることなきふるさとのもろもろ憶ふ昔の事も

「丹青」八月号その他

尋常高等小学校同級生

三 浦 喜美子

私達同級生は四十八名です。男子三十名、女子十八名です。ただし、四十八名揃って机に着いたことはありません。当時義務教育は尋常高等小学校六年生でした。卒業後働きに出た男性は二人程おりました。女学校に一人、中学校に男七人進学し母校を後にしました。

同時に分校より女一人、男六人、私達残りの方々と一緒に高等科に進みました。小学二年生の時一人、小学三年生の時二人、共に男子が病の為亡くなりました。また、高等科卒業後両親の反対を押し切つて志願兵として入隊し戦死した一人がおります。高等科二年卒業後、家政科三人、専修科に五人進学し、共に二年で卒業でした。

男女問わず同級生はほとんど生まれ育つた故郷に住んでおります。年を重ねると共に現在、男十名、女十二名生き残っております。数年間寝たきりの方、うつ病の方、認知症の方、歩くのが大変の方等々で同級会に出席の顔触れは毎年同じで、男六名女六名です。

私は今年の出席をどうかと迷いますが、「今年も元氣でお会いする事を楽しみに」と年賀状を頂くと心が動くのです。私の妹達は喜寿のお祝い後同級会は中止になったとの事で、私達は八十五才になつてもよく続くものだと感じております。

大東亜戦争の為、長男が戦死して八人の人が家のために、どうしても長男の嫁と結婚することに

なりました。結婚と同時に甥、姪の父親にもなるのです。どうしても納得のいかない一人の方は関東方面に逃げて行きました。その後一度も同級会には出席しておりません。

男子が不足の事もあり、婿に行った方は五人でした。三人の方は実家の近くに分家して貰いました。また、長男として生まれた方々はラッキーでした。

還暦の時より毎年同級会が行われましたが、私は遠くに住んでおり、三年に一回出席しております。ある年の同級会に出席した私は驚きました。兄嫁と一緒にあった方々が同級会が何より楽しいと、「酒びたり」になり、「好きで一緒になったのではなかった」と段々と愚痴になりました。誰が悪いのではなく、生まれた時期が悪かったのです。男性ばかりではなく、女性だって同じ事でした。

結婚と同時に大家族の為、並々ならぬ苦労があった事でしようが、楽しい同級会場での愚痴には閉口しました。

私が入園して三年目のお盆が過ぎ去る頃、『祖母キトク スグ帰レ』の電報が来ました。当時分館長の方が、今日は遅いから明日帰る様にと列車の時間を教えてくれました。本当に有り難く頭が下がりました。心配しつつ家に着いた時、奥の方より笑い声が聞こえて来て安心しました。祖母は元氣になり、叔母、姉妹達が喜んでいました。

話によると、祖母は風邪の為休んでいた、急に悪化し医者に診て貰った所、肺炎との事、油断出来ないとこの事でみんなに知らせたとの事でした。一命を取り止めて皆大喜びしました。

祖母の話に依ると、歩いていると一面花畑の所に着いた。あまりの美しさに進んで行つた。そこに大きい人が立っており、お前の来る所ではないから帰る様に言われたが、花好きの祖母は見とれていると、今度は大声で早く帰れと言われ、驚き目が覚めたとの事でした。私は今でも不思議に思っております。父は、「祖母は生き返つた。きつと長生きする」と大変喜んでおりました。その通り

両親の最後を見送り、一年後に自分も去りました。

祖母も元気になった故、青森に帰ると思つた時、電話が鳴つた。それは全く思いも依らぬ同級生からだつた。「今、駅前の食堂で同級会を開いているから来て下さい」との事。私は「帰る所ですから行けませんから、皆様によろしく」と言う、「迎えに行つたから必ず来てくれ」と電話が切れた。

私は驚き、どうしようかと迷っていると、両親に「出席するように」と言われた。そこにアツという間に単車で迎えに来て、無理矢理乗せられました。

一同出迎えてくれました。その時私の頭は真っ白になり、何を話したか全く覚えていません。楽しいというより、病の身の私を承知の上、招いてくれた事に感謝の気持ちで一杯でした。

私が駅を出た所を一人の同級生が見ており、お盆の為実家に来て居る皆々様に連絡し急に同級会を開くことになつたとの事でした。

帰りも、迎えに来てくれた方が送つてくれました

た。私の為、お酒も飲まずに、本当に申し訳なかつたです。両親が気をきかせてお酒を渡してお礼を言つてくれました。同級生も喜んで帰りました。その後の同級会に出席した際、あの時に送り迎えしてくださつた方にお礼をと思いつつも、当人が忘れて居るかも知れないと伸ばし伸ばしにしていましたが、思いきつて去年五十八年振りでお礼を言いました。

忘れて居るかと思いきや、よく覚えており驚きました。「あの時迎えに行ける人は二、三人いたが、私が行つたのだ。」酒の勢いもあり、また年を重ねた事もあり、

「お前のことが好きだつたから行つた」との事。

その時は、お礼を言いましたが、好きな訳はないのです。小学六年生で卒業し中学に進学し学校の先生になつたのですから。時間とは有り難いものです。都合のいいことを言い、頭をかき上げる事ばかりですが、それを種に笑い賑やかな同級会でした。今では何を言われても、笑つて聞き流す事が出来るのです。

在学中は、午前中は勉強で午後は出征兵士又は戦死した方の家の農作業の手伝いでした。

また、毎月八日は全校生徒が近くの神社に必勝祈願にお参りし、日の丸弁当の日と定めていました。

戦争が長引くにつれ、食糧、衣類の不足が悪化して来ました。祖母、母の着物を作業着に作り、姉共々着ていました。娘時代は何時も黒いものばかり身に着けていました。「欲しがりません。勝つまでは」の合言葉で一も二も国の為、必死の生活だったのです。終戦の翌日は回覧板が来て部落一同、休日になる知らせでした。戦死の一報が入ったり、月日が経つにつれ、兵士の方々が誰に知らせる事なく帰って来ました。ご苦労様でした。私の兄が帰って来た時は嬉しさ一杯でした。

兄は関北方面に開拓食料増産指導員として行って、国内の為、早々と帰って来ました。外地ばかりが国の為ではないのに、なぜ両親は兄の居場所を私達姉妹に教えなかったのか、今更知るよしもないのです。

ないのです。

どうしても忘れる事が出来な事があります。

その日は小学校の私の入学式でした。長男、次女には母が一緒だったとの事でしたが、私の時は父でした。体育館での式が終わった後は教室に入って自分の机に案内され、先生の話を聞きました。その後は母親に手を引かれ帰る人、人。父が見当たらないのです。私は泣いてしまいました。先生はちよつと待ってね、今探して来るからと出て行きました。間もなく父ともう一人の男の人が急いで来ました。父はゴメン、ゴメンと何度も言っておりました。よく見ると少し向こうの方に一人の男子生徒が座っておりました。父と一緒に来た方は、その子供の親だったのです。私は泣き虫でしたが、さすが男の子と感心したのを今でも覚えております。

帰る早々、父はこの事を、祖母、母に報告しました。偶然入学式で同級生に会い、小使室で話している内、時間の経つのも忘れたとの事でした。

すると、母は「だから私が行くと云ったのに。一瞬とは言つても寂しい思いをさせて」と父に強く言っていました。

学校の門を入ると、左の方には先生方の玄関、真ん中は一年生から四年生、又高等科一、二年生の出入口で、右の方は五年生、六年生の出入口でした。姉は四年生で出入口も同じ、又廊下の奥の教室に居ると思うと安心でした。下駄箱に私の履き物が無かつたりすると、すぐ泣き出しておりました。姉が何時も助けてくれました。

一年生も終わる頃、姉は「今年から別の出入口から入る事になり、すぐ助ける事は出来ないから泣き虫を卒業するように」と言われました。私はすべて姉に甘えており、今年からは決して泣かないと決意しました。

姉や妹達には部落に同級生が二人か三人おりました。姉、妹達が風邪で休んでも誰かが今日の学校の出来事を教えに来てくれました。私には、部落に同級生は一人もいませんでした。だから学校

は休む事は出来ない、また休んではいけないと自分で決めました。少し熱があつても両親の反対を押し切つて登校したこともありました。六年生卒業の時、辞典を頂き、高等科卒業の時は硯箱を頂きました。兄弟では私一人でした。その割に勉強が出来た訳でも無く、無欠席、それだけでした。

祖母は、皆同じ様に育てた積もりでも、一人一人皆違う。子供を産んだことのない祖母は、お前達が大人になるのが楽しみとよく言つておりました。十人十色と言いますが、七人七色、どう映つたのか？

私はハンセン病となり、並々ならぬ心配をかけたが、祖母、母が元氣な内に退園が出来た事が何よりの孝行ではなかつたかと自負しております。

妹が一年生になった時、よし、今度は私が妹の世話をと、張り切つておりました。ところが、体格のよい妹は元氣で友達もすぐ出来て走り回つており、私の出番は全くありませんでした。勉強があまり好きでない妹は、仮病を使い学校を休む事

人事異動

もありました。熱も無く、食欲も有りながら、皆んなが学校に行っている時、床で遊んでおり、学校から帰る頃に床に着くのです。この事は祖母から聞きました。両親には言わず見て見ぬ振りをしていた祖母でした。骨太で百姓の嫁には持つて来

いだと両親もよく言っていました。その妹を祖母の実家の嫁にとの話が舞いこんで来ました。血筋は無いものの、親戚の家に嫁がせる事はどうかと、両親は大反対したのですが、祖母に負けて嫁ぎました。私の病気を承知の上での事でした。主人を早く亡くした妹でしたが、良き息子夫婦に恵まれ、今は幸せ一杯です。

帰郷する私にも大変良くして頂き、実家が二軒ある気分です。

同級会は今年で終わりかと思いつつも続いております。案内状が来ると、友達より出席する様電話が鳴るのです。退園し、再入園した私に優しい同級生にお礼の言葉が見あたりません。

今日まで、出席出来た事に感謝しつつ、明日に向かつて前進致します。

【採用】

言語聴覚士

成田 麻衣子

(平成25年7月1日付)

看護助手

(非常勤職員・庶務課会計班配置)

三浦 康世

(平成25年7月8日付)

【辞職】

内科医師

藤田 雄

看護助手

對馬 由紀子

(平成25年7月31日付)

【採用】

内科医師

館山 俊太

(平成25年8月1日付)

野の花の微笑^{ほほえ}み

比良信治

(6) 津軽と蝦夷キリシタンの話

七月に入ると、小樽^{うしお}潮まつりの看板やチラシが用意され、文太郎も老人ホームチームの一員として、今年こそは参加してみたいと思っていた。しかし、高齢の二人の方の病状が悪く、文太郎にとつては一番神経の使うところで、まつりの輪の中に入つていけない状態だった。

そんなある日、青森の清水恵子より大判の封筒に入った重そうな手紙が届いた。それによると、交通事故で急死した恵子の兄の、遺された本棚より、「重要」と印された封筒の中に、数冊のノートとコピーした印刷物が相当枚数でてきた。姉夫婦によると、亡くなった両親の青森の古里を訪ねたりしていたが、何時か弘前より帰ってきた時、「おやじたちはキリシタンだったかもしれない、少な

くともその血を引いているようだ」と、微笑んでいたことがあった。印刷物を見ると、そのキリシタンのことを調査したり、研究した学者の論文もあった。

「文太郎さんは、歴史に興味を持ち、道南のトラピスト修道院や、千軒岳のキリシタンの殺された山地を訪ねたりしていたと、聞いていたので、兄の残された書類を送るので、どういふものか、本当に両親たちのこともわかったのか、調べて教えてほしい」という内容だった。

えらいことになったと、文太郎は思ったが、本心は嬉しかった。忘れかけていたキリシタンの資料を恵子の兄が調べていたとは内心驚いた。とくに、蝦夷時代に徳川家光の厳しい達しによって、

松前藩のドル箱であった大千軒岳一帯の砂金掘り
鉦夫の中に、本州各地より流れてきたキリシタン
が大勢いたということは事実で、寛永十六年
(一六三九)に一〇六人処刑されている史実が
残っている。

恵子の両親は北海道の福島の山村にいたが、兩
親の親たちは津軽に逃れてきて、海を渡って福島
にたどりついたのかもしれない。そのことを兄は
調べていたのであろう。

「津軽藩とキリシタン」石戸谷正司。「津軽藩
時代のキリシタン類族について」小舘衷三。もう
ひとつは「津軽切支丹の一考察」松森永祐と題す
る論文をコピーしたものが、目についた。何れも
「弘前大学国史研究会」に発表されたもので、こ
ういう論文を入手したのは、兄の前島秀一は弘前
大学のどなたかにお願ひして、大学の図書館より
入手したものである。しかも、すべてガリバン
印刷で昭和三十年代のものである。会社員の兄さん
は調査研究にかなりつつこんでいるようであった。

翌日の夜に、清水恵子に文太郎は電話をかけた。
「恵子さん驚いた。兄さんが持っていた史料は

一級品のもので、ぼくも興奮して手にとつて読ん
でみた。まだすべてを読んでいないが、ノートを
見てからまた電話しますね。ぼくの眠っていた探
求心が、今こどろりしているところさ」

「びっくりしたでしょう。でも姉もわたしも
持つていてもわからないので、文太郎さんに送つ
てみたのよ。よかつたわ。それで八月のねぶた祭
りにはおいでになれるの？お母さんも期待してい
ますよ」

「それがねえ、おふたりのご老人が危篤状態が
続いていてね、万が一の場合はぼくが責任もつて
ご遺族に協力してあげねばならないのでね。今の
ところねぶた祭りに行けるとはいえないんですよ。
母にそのことを伝えておいて下さいね。」

「それじゃ、江差の姥神神社の祭典を見にい
くこともあやしいのねえ。」

「そうなんですよ。でも今度行ったら、あなた
の兄さんの史料を早く読んでみて、津軽や蝦夷キ
リシタンのこともあつて、ぜひ行ってみたいと思
うので、何れにしても三厩みんまやから船で渡りたいと
考えているんです。松前や江差にも行って見ます。

あなたもそのつもりでいてくださいよ」

「嬉しいわ。何れにしても船で渡つて松前と江差には行くのね。そのことをお母さんにも伝えておくわ」

「おみやげはぼつぼつ用意しているところ、とくにご希望はありますか」

「うーん。何よりもあなたにお会いしたいわ。ごめんなさいね、本心をいってしまつて」

「それは参りましたね。今度はあなたを案内するんですからあなたは、園長の許可をもらうように」

「そうね、何よりもおばあさん方のすきな海産物がいいわ。色々とね」

「わかりました。それではおふくろに呉々もよろしく伝えて下さい。今夜はこれでバイバイ」

やがて、小樽の潮祭りもやつてきた。文太郎は揃いの印半てんを着て、祭りには参加ができなかった。一人のおじいさんは、市立病院に移つて一進一退を繰り返していた。今ひとりのおばあさんは、老人ホームの病棟で酸素マスクをつけてがんばっていた。

しかし、潮祭りが終つて、あたかも潮が引くように市立病院のおじいさんは眼を閉じられた。市内の実家にご遺体は戻り、葬儀が行なわれた。文太郎や担当の職員もお手伝いをして、九十歳の生涯をたたえた。

八月に入つて間もなく、九十三歳のおばあさんが遂に息をひきとられた。ホームの一室でさやかな葬儀を行なつた。木村園長は型通りの弔辞を読まれた。文太郎はおばあさんの歩みと園内でつくした良い点を述べた。おふたりとも二十年近く入院されていたので、お年寄りたちの多くの方々が葬儀に参加して、野辺の送りをした。

葬儀を終えたのは八月七日。既にねぶた祭りの本祭も終り、江差の姥神神社の本祭も四、五日で終つていたが、町内会よりの山車が十三台でる後祭りは九日より十三日迄行われる。文太郎はこれには間に合うと計算した。この文化財に指定されている十三台の山車は文太郎は早くに一回見ているが、京都の祇園祭の山車におとらないもので、清水恵子にも見せたかった。

文太郎は園長や職場の同僚の了解をえて、青森

のおふくろの所へ向つた。

急行列車から青函連絡船に乗り移つて、療養所の夕食が終つた頃をめざして、文太郎は病棟の中に入った。

「おまたせしました」といって文太郎は入口に立つて頭を深々と垂れた。「おかえりー」「まつてましたー」という声が誰からとなしに掛けられた。母は両手を広げて、招くようにおいで、おいでと微笑みながら手招きしている。みなさんの表情は元気でひと安心と、文太郎は見てとつて、母のそばにかけよつた。

「あなたのことは恵子さんよりいちいち聞いていましたよ。葬儀が続いて忙しかったそうで、でも元気で何よりですー」

「ねぶたに來られなくて残念でした。でもこれから江差である豪華な祭りには、間に合うのでゆつくりできないけど、かんべんしてね」

「恵子さんを案内するそうで聞いていましたよ。なれない旅でしょうから気をつけてー」

おふくろは恵子とのいきさつを大体了解しているように内心ほつとし、本番に入った。

「ではささやかなお土産ですがどうぞー」

文太郎は二人のおばあさんに、ついで退院して住宅に入ることがきまつている清水恵子に、そしておふくろさんにと、紫色の風呂敷に包んだ物をそれぞれ手渡した。

四人とも目を輝かせて微笑みながら、包みをほどこきをのぞき込む。

「すごいね、小樽の水晶飴玉にえびのビスケットね。瓶詰では福神漬けに佃煮、それに海苔ねー」

と、若いおばあさんに続いて、恵子が、

「缶詰では、うに、たら、かにはロシアのたらばがにね。何れも二つ重ねよ。文ちゃんありがとうー」

「福の神が参いこんだようなものね」

「真夏のお正月の再来よ」

二人のおばあさんは、文太郎に頭をさげる。

母も満足したように、微笑みながら文太郎を見つめて、頭を下げてお礼をいう。

「ご苦労さまね。ありがとうさん」

文太郎にとっては四人分合せてもたいした額に

はならないので、これ位で親孝行になるので安心するのである。

その夜は、母のいるベッドのそばで恵子と松前にいき、江差にくるルートの打合せをした。母は江差の姥神神社のお祭りを見ていないが、文太郎が東京の大学を終えた夏に、亡くなった父と見学した写真をもつていて、なつかしい話となった。

しかし、今の文太郎にとつては、姥神の祭典よりも、津軽や蝦夷キリシタンの探索の方に興味が強まっていた。そこで文太郎の考えを述べた。

「恵子さんの兄さんが、津軽のキリシタンのことを調べていて、ぼくも大変勉強になったのは、津軽へキリシタンがやってきた足跡を調べたことなんですよ。」

徳川家康がキリスト教（邪宗門）禁制の布告を出したのは慶長十九年（一六一四年）春。この時にキリシタン大名の名簿も作られた。特に高山右近はルソンに流された。一般キリシタンとしては総数七十二名、そのうち京都から四十七名、大阪から二十四名であったという。大阪といっても今の神戸や堺も入っているようであり、大学研究者

は七十二名は家長である男子の数であるから、彼らの妻子や父母、親戚なども加えると三倍、四倍以上になるといふ。家康はこれら一行を未開地の津軽へ流したのです。」

「ところが津軽藩の津軽たのぶ為信藩主は、当時豊臣秀吉の大阪城に行くのに、陸路約三十日間かかったという。その一行が京都、大阪に何ヶ月もいる間、諸大名は外国人宣教師を通じて外国の貿易のやり方や戦争の勝ち方等武器や戦術の情報を学びとつたという。このために信長や秀吉も初めは歓迎した。しかし仏教者や識者からキリスト教の宣教を通じて、やがてその外国軍隊をおびきよせて日本国を占領するのではないか、という作り話が広まり、秀吉も徳川家康もキリスト教禁制へと向かっていったのですね。」

「そのことはわかってるわ。大東亜戦争をみると、キリスト教などの宗教が戦争を仕掛けるのではなく、日本でいうならば仏教徒や神徒の軍国主義者が中国や朝鮮をわがものにしようと戦争を仕掛け、その国民を苦しめる大戦争をやつて、とうとう負けたんでしょが。」

母が唇をへの字に曲げて言う。

「その通りだね。キリスト教は戦争に反対し、平和を守る宗教であることが浸透していかなかったからね。しかし、京都や大阪ばかりでなく、キリシタンの市民が多かった長崎や九州各地の人々も辺境の津軽に流刑されていたんですね。」

特に恵子さんのお兄さんが、津軽のどこを流刑地にしようとしたのか、と探っているノートを読んでおもしろかった。」

文太郎は、コップの水をぐくと飲み込んで一息入れてしゃべり出した。向かいのおばあさん方もビスケットをかじりながら、耳をそばだてて聞いているようだ。」

「津軽の殿様や息子たちは、都の大阪や京都に出てくると、何ヶ月もいるので、その間宣教師の教えを受ける。津軽為信藩主もキリスト教の教えに反対するところがなく理解した。二人の息子たちも父の導きによって教えを受けて三男の信牧のぶひは洗礼をしている。洗礼せずも、教義を受け入れる姿勢を父君や子息は持っていた。その教えによって、流刑人たちのために農具や資金などの協力を

されている。

ところで流刑地は一方所ではないと推測されるが、一つは十三湖の上部にある外ヶ浜。二つ目は鱒ヶ沢から十三附近。三つ目は鱒ヶ沢から高岡（今の弘前）の周辺をあげている。兄さんは大阪や関西の人々は、二つ目の十三附近ではないかと推測している。きっと堺の附近に住んでいた恵子さんの両親の先祖は、津軽藩の陰の協力を得て十三の地に流れ着いたのであろうと。」

「それじゃ、恵子さんも十三湖周辺に行つて見ないと」と文太郎の母が言った。

「行つてみたいと思います。でも耕作した土地は今ほ砂山になり、昔からの津波や地震によつてあの周辺の土地は変わつていようですよ」

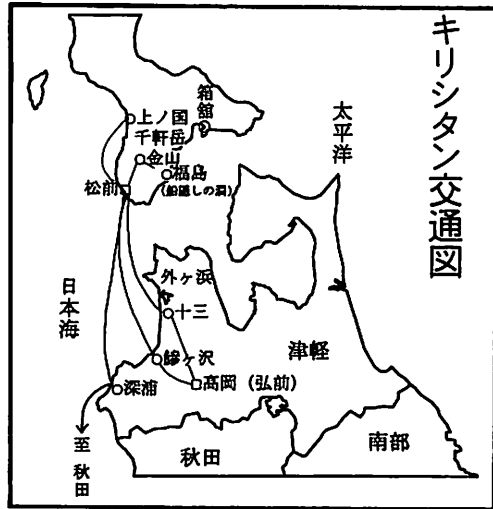
恵子はうなずきながら答えた。

「実は僕も学生時代に、小樽へ帰る時に津軽線に乗つて十三湖周辺を歩いて、三厩から船のつて松前に出たことが、何回かやつているんです。改めて兄さんの調査した後を何時か訪ねてみたいと思います。今回は素通りしてー」

「ところで、蝦夷に渡つたキリシタンはどこか

らどうやって行つたのかしら?」

キリシタン交通図



文太郎の母が尋ねた。二人のおばあさんも興味があるように首を振って、文太郎の方を見つめている。

「うーん。その前に当時の松前藩について知ってほしいことがあるんです。当時の蝦夷地には米がとれていなかったこと。だから、松前藩といつても本州の各藩のように何万石という殿様ではなかった。何で藩の収入をあげたと言えば、場所

持ちの家臣が、夏の一年一回商船を仕立て、蝦夷地の奥地に住む蝦夷人（アイヌ民族）が欲しがる米やコウジ、古着、鉄器や漆器などを積んで、交易に出かける。蝦夷人が生産する干鰯、干鮭、毛皮、織物などと交換して帰り、松前で近江や関西から来ていた商人たちに売り、その利益で生活した。この取引のときに課税をして藩の収入にあてた。だから、松前藩は『商人集団』だとか、『士商兼帯』は武士の風上にもおけないと、他藩より悪口言われたという。それだけに、蝦夷地への入国は厳しく制限していた。和人が住むのは松前地方と箱館近郊のみで、当時で約一万人弱といわれる。蝦夷が島は蝦夷人（アイヌ民族）が住む島であつた。」

「文太郎、キリシタンはどうやって蝦夷地に入ったのさ？」と、母は再び質問した。

「西洋よりきた宣教師は少数ながらキリスト教の宣教にあたった。そしてキリシタンの迫害が始まる頃に、元和三年（一六一七年）に、松前の千軒岳の各地で砂金が発見された。それが西部、東部、大沢と続々と砂金が発見され、ゴールドラッ

シユになつた。松前藩は砂金掘りから月一人一匁の砂金を徴収した。このために、人手不足のため蝦夷地入国管理をゆるめて、砂金掘りが本州より入つてきた。」

「その流れにそつてキリシタンも蝦夷地に入つたのね」と、恵子が言う。

「そうなんですよ。千軒岳の砂金は川に流しこんで砂金を取り上げる方式ですから、誰でも出来るんです。松前藩は労働力不足のために流刑人も取り調べることなく労働させた。それによつて収益を上げ、家康公にも元和六年（一六二〇年）砂金百両を献呈している。外国人宣教師も変装して松前に入り、金山にも入り、キリシタンを励まし、千軒岳金山に隠れた教会をつくり、ミサも宣教師によつて行われているんですよ。」

そして、家康、秀忠について家光が三代將軍になると、彼らはキリシタンの弾圧を更に厳しくすすめた。それは長崎の島原で農民が拝借米で訴訟を起こし、やがて農民が蜂起し、青年キリシタン天草四郎を大将にして島原城に立てこもつて、幕府と闘う島原の乱が起こる。この戦後には宣教師

もキリシタンもしらみつぶしに全国的に取り締まり、処刑していった。そして五人組制度をつくり、キリシタンでない証人として、地域のお寺に檀家として登録させる方式をとつた。これらは僧天海の入れ智恵とも言われた。農漁民、商人たちはお寺の監視を受けているようなものだった。すごい弾圧政策が寛永時代より続いたんですね。」

「それでもキリシタンは密かに隠れて生き続けたんでしよう」と、母が相づちを打つ。

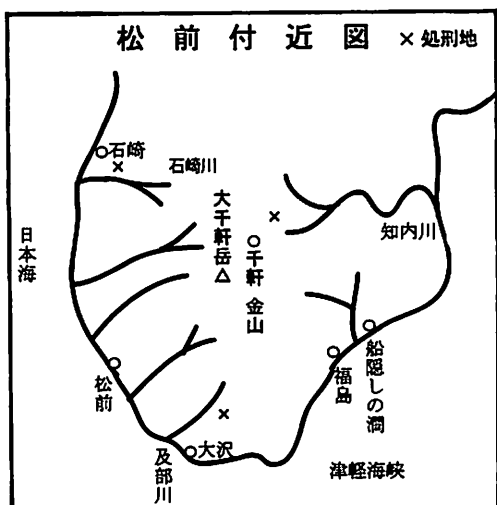
「松前でのキリシタンの処刑はどうやったのさ」と、恵子が尋ねる。

「津軽へ流刑されたキリシタンに密かに米などを長崎地方から船で送つて助けていたデ・アンジェリス宣教師が、津軽から蝦夷地に密かに渡り、キリシタンの人々に支援の手をのばしていた。元和二年（一六一六年）のことです。」

その頃の松前地方は砂金掘りの人夫でふくれあがり、キリシタンの数も急増していたのです。その後、カルワラ宣教師が元和六年（一六二〇年）八月に松前に入り、初めてミサ聖祭をしたという。

私も千軒岳に夏にトラピスト修道院の神父様に

ついで登って、頂上近くの祈念碑のある所で、処刑されたキリシタンの方々の追悼の祈りに出たことがあるんだよ。山道は崖にそっていて厳しく柔らかい道で歩きにくかった。



ところで、松前公広さきひろという当時の殿様は『領内にはキリシタンはなし』と幕府に報告した。ところが二、三の仏教僧から、千軒岳で働く鉱夫の中に多くのキリシタンがいると報告があつて驚いた。実際には弾圧のない蝦夷地に多くのキリシタンが

潜入していた。彼らは山の麓に小さな礼拝堂をつくり、聖母マリアに捧げていた。マリア観音寺と呼んでいた。まさにキリシタンの天国だった。

しかし、藩公は部下に調査させて寛永十六年（一六三九年）に、一〇六人のキリシタンを召し捕り首を切つて殺した。内訳は、大沢地区で五十人処刑し、逃げた六人を今の上ノ国の石崎で処刑。さらに金山番所のあつた地区で五十人処刑した。この中には女性の方もいたと言ふ。

藩主公広は幕府にその旨報告して、キリシタンはいなくなつたと報告したが、実際には藩役人や町民の中にもいたけれど、調べることもなく終つたと報告したのです。中にはお医者さんでキリシタンの方がいて密かに布教し、宣教師とも連絡していたともいう方もいたし、後に金山の取締役の役人の中にもキリシタンの方がいて、この方は後に江戸送りにされたという話です。」

文太郎の長い報告は終わつた。文太郎は宿舎に戻つて明日の旅立ちの準備をして布団の中にもぐりこんだ。

（つづく）

五月中

- 9日○保健科運営委員会
- 10日○第15回執行委員会
- 15日○第29回（平成25年度）歌謡交流大会
- 16日○第16回春季親善交流ゲートボール大会
- 17日○男 九十一歳死亡 福岡県出身
- 〃 〃 〇地区連絡係定例集会
- 〃 〇福西征子名誉園長来訪
- 19日○女 八十九歳死亡 岩手県出身
- 24日○第16回執行委員会
- 31日○第17回執行委員会

六月中

- 2日○平成26年度予算要求統一行動の為、石川会長出張（5日帰園）
- 3日 国立ハンセン病療養所施設長会議（東京）
- 4日 第1センターとの話し合い
- 5日 五所川原市立看護学院施設見学
- 6日○大阪同和人権問題企業連絡会啓発研究会9名来園、石川会長が園内を案内

7日 全国国立病院看護部長協議会等合同会議（仙台市）

〃 〇北海道庁 工藤氏、はまなすの里 平中氏、外一名来訪

10日 第2センターとの話し合い

〃 〇6/10付採用 石村春美看護助手 挨拶に来訪

14日○第18回執行委員会

〃 〃 〇地区連絡係定例集会

18日 中央センター1階との話し合い

19日 盲人会懇親会

〃 〃 中央センター2階との話し合い

〃 一般寮交流会（サンロード青森・イオン青森店）

20日○「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」式典・ハンセン病問題対策協議会に出席の為、石川会長出張（5/22日帰園）

21日 「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」

〃 歌つこ広場

26日○平成25年度高齢者慰安バスレク（鶴田町つがる富士見荘）

七月中

1日○7/1付採用 成田麻衣子言語聴覚士 挨拶

に来訪

2日○むつ市女性団体連絡協議会22名来園、石川会

長が園内を案内

3日○不自由者棟入居者慰安(七夕祭)

5日○第19回執行委員会

” 消防訓練14時

8日○7/8付採用 三浦康世看護助手 挨拶に来

訪

11日○保健科運営委員会

17日○国立ハンセン病資料館学芸員 金貴粉氏、田

代学氏来訪

” ○地区連絡係定例集会

” ○参議院議員通常選挙不在者投票

19日 岩手県慰問

” 歌つこ広場

21日○参議院議員通常選挙

22日○第1四半期自治会会計業務監査(〜23日)

23日○青森ロータリークラブ 松隈氏、外4名挨拶

に来訪

24日○「成瀬豊 追悼展」開会式

24日○紫波町民生児童委員協議会15名来園、石川会

長が講演

25日○第31回(平成25年度)納涼祭

26日 福島県慰問

” ○第20回執行委員会

30日○北海道はまなすの里・北海道共催による「第

10回ハンセン病に関する青少年研修」

(7/29〜31)で石川会長が講演

編集後記

◇長い間扉が閉ざされたままだった交流ホールが遂に日の目を見ることとなった。その先陣を切ったのが「成瀬豊追悼展」である。実は成瀬さんと小誌は縁が深く、表紙のイラストや本文の挿絵を何点も描いている。「叫び」をはじめとする三十年以上も前の作品が今甦り、社会と保養園を結ぶ架け橋となっている。これを機にギャラリーなど、社会交流に利用されていけば、園内も賑やかになる。成瀬さんも今頃天国で絵筆を握って次の構想を練ってるかもしれない。

(編集部)

2013年 ねぶた祭り

8月6日毎年恒例の青森県庁よりのご招待で、21名の入園者がねぶた祭りを観覧しました。



まずは、県庁内会議室にて知事と懇談



栈敷の前は次々とねぶたが通過



青森県庁ねぶた



ハンセン病啓発の幟



今年のねぶた大賞「日立連合ねぶた」



「へば！また来年…」

国立療養所松丘保養園要覧

松丘保養園は国立のハンセン病専門の療養所で、創立してから今年で104年の歴史があり、ハンセン病患者の医療と福祉を事業としております。

所在地

青森市大字石江字平山十九

園長 川西健登

保有敷地 二三〇、五四八平方メートル
(六九、八六三坪)

建て面積 三〇、三五八平方メートル
(九、一九九坪)

延べ面積 三六、〇三六平方メートル
(一〇、九二〇坪)

交通案内

□電車の便

1. 東北新幹線・新青森駅下車

(車で約3分)

2. 奥羽本線津軽新城駅下車

(車で約5分)

□バスの便

1. 青森市営バス西部営業所行

2. 弘南バス浪岡・五所川原・黒石

行き 共に松丘保養園前下車

□航空機の便

青森空港より (車で約30分)

□高速自動車道の便

青森ICより (車で約5分)

□なお保養園に隣接して桜の名所三内盤園(1km)と国の特別史蹟指定の三内丸山縄文遺跡や県立美術館(2km)等があります。

発行所

財団法人 松丘保養園慰安会

所在地

〒〇三八―〇〇〇三

青森市大字石江字平山十九番地

電話 (017)(788) 〇一四五・〇一四六

発行人 川西健登

編集人 甲田の裾編集委員会

印刷所

青森市本町二丁目十一―十六

青森オフセット印刷株式会社

電話 (017)(775) 一四三一―番